

III-9 小児鼠径ヘルニアに対する腹腔鏡下経皮的腹膜外ヘルニア閉鎖術施行症例の検討

○木村 俊郎 須貝 道博 石戸 圭之輔 小林 完
齋藤 傑 三橋 佑人 袴田健一
(弘前大学医学部附属病院 小児外科¹)

III-10 血液透析患者 (HDP) における血中および毛髪中濃度からみた微量金属量の考察

○山谷金光¹、坪井滋¹、葛谷知佳子¹、米山美穂子¹、
佐藤美沙季¹、齋藤久夫¹、畠山真吾²、大山力²、
舟生富寿¹
(鷹揚郷腎研究所弘前病院¹ 弘前大・院医・泌尿器科学²)

III-11 潰瘍性大腸炎術後短期成績と長期肛門機能から見た治療戦略の構築

○小笠原 紘志 坂本 義之 諸橋 一 三浦卓也
神 寛之 佐藤 健太郎 袴田 健一
(弘前大・院医・消化器外科学)

【はじめに】潰瘍性大腸炎 (以下 UC) に対する外科手術は減少傾向にあるが、手術を回避できない症例も少なくない。UC に対しては、肛門管上皮までの大腸全切除の有無により回腸囊肛門吻合術 (以下 IAA) および回腸囊肛門管吻合術 (以下 IACA) の術式があるが、腹腔鏡手術の導入により、精微な手術操作のみならず神経温存による機能維持への期待がもたらされ、現在当科では原則として IAA を行っている。今回、当科における UC 手術症例の臨床背景、手術関連因子および術後の肛門機能に関する検討を行った。【対象と方法】当科で 1998 年から 2014 年に潰瘍性大腸炎に対して外科治療を行った 109 例について、2004 年以前 (前期) とそれ以降 (後期) による術前治療、術式選択の変遷、術後合併症に関して検討し、また、109 例中郵送式アンケートで回答を得た 58 例に対し術後肛門機能を検討した。

【結果】前後期において、臨床的背景では、手術件数の減少、術前治療としての免疫抑制剤や TNF- α 阻害剤使用の増加、ステロイド投与量に関し、有意差を認めた。手術適応として、内科的治療抵抗性については有意差を認めなかった。術式については後期では IAA が多い傾向にあった。術後の肛門機能については、Wexner score, Kirwan's score を用いて評価し、いずれも継続的には改善する傾向にあった。また、これらの評価法を臨床背景、手術関連因子について多変量解析したところ、40 歳未満、IACA が肛門機能良好な因子であった。また、IAA と IACA を Wexner score の項目別に比較すると、すべての項目で IACA が良好な結果となった。【まとめ】内科的治療の変遷とともに手術件数は減少した。術後長期の肛門機能温存の観点からみると、IACA の選択は妥当だったと考えられたが、腹腔鏡下での IAA の導入により機能維持と根治性をともに期待できるようになったため、今後、本結果との比較検討の必要がある。